

社説

日本の川の名は多く地名(例えば大和川)、形態(堀川)、人名(道頓堀川)にちなんでいる。「紫川」(北九州市)の場合はどうなのか。

紫川の命名に関しては諸説紛々で、よく分からないそうだ。北九州市の中心部(旧小倉市)を漂流している二級河川だが「公害都市・北九州」という汚名のもとに、一時は優雅で高貴な「紫」とは恥ずかしい。名前を変えたらどうか」という皮肉さえ聞かれた。小学生は紫川の絵を真っ黒に塗りつぶしていた。

それがどうだろう。昭和50年初頭までBOD40〜50mg/lだった水質は1mg/l以下に改善され、文字通り市民の憩いの場になっている。11月25日、北九州市で開かれた「下水道概成記念国際シンポジウム」に出席した内外の専門家も、紫川の清流に目を見張った。今や紫川は紫を超

えてブルーに輝いている。

国際シンポでは「下水道概成記念と

謳っていた通り、紫川が甦ったのは下水道のお陰である。下水道普及率が向上するにつれて紫川の水質は改善されてきた。「昔の紫川を取り戻そう」という市民運動も全国的な注

以上が堀川流域に集中している。「母なる川」の実現には合流改善が不可欠なのだ。

水都・大阪を代表する道頓堀川も同様である。市内の97%が合流式下水道だが雨水吐口は意外と少なく、残っているのは57か所。しかしその内の28か所が道頓堀川ぞいに集中しており、これを解消しなければ

清流の創出に向けて

目を集めた。

道頓堀川はきれいにならない。

市民運動では2010年の開削400年に向けて名古屋市の堀川浄化活動も熱い盛り上がりを見せている。この場合も決め手は下水道だ。名古屋市中では都心を中心に合流式下水道が整備され、自然吐口114か所のうち49か所が堀川に集中しており、支川の新堀川沿いの20か所を加えると全体の半数

都市河川をきれいにして「まちのシンボル」にまで高めていくためには、何よりも市民の協力が必要だが、行政面では河川・公園・道路・住宅といった部門の連携が要求される。

とりわけ「下水道の再構築」が必須なのだが、この点、住民に正しく理解されているだろうか。身近な清流に憩う市民の脳裏に「下水道」がひらめいているだろうか。

国交省下水道部ではこの点を重視して「新11プロジェクト」の一つに「下水道事業に対する正しい理解のための情報発信プロジェクト」を掲げ、特に11月は「下水道の情報発信月間」だった。

去る28日には大和川を擁する堺市でも「水によみがえる懐かしい未来都市・堺」下水道による水環境再生へ」という国際ワークショップが開催され、11月21日には東京で「首都圏と東京湾の共存を考えるシンポジウム」が開かれるなど、全国で多くのシンポが住民参加のもとに展開された。

繰り返し強調したい。都心に甦った奇跡の清流・ウオーターフロントに集う市民の頭には未だ下水道のイメージは甦っていない。「わがまちの川も紫川のように」と願う人も、下水道にまで考えが及んでいないのではないか。「下水道情報発信月間」を踏み板にして、引き続き下水道ブームの盛り上がりに向けて邁進していくべきだ。